

特113

889

竹生島



始



93/113  
889



ツレ	ワキ	後シテ	ツレ	前シテ	役別
從者二人	臣下	天龍	女	漁翁	
右同斷	高砂同斷	絹扇 〔面〕小面 襪 雲 黒垂 天冠 着附箱 白大口 腰帶 長	〔面〕黒髭 襪 赤頭 龍 龍鬘 着附厚板 半切 法被 腰帶 打杖 珠持つ	〔面〕小尉 襪 尉髮 着附小格子 水衣 腰帶 扇	裝束
能	脇	類別	所	近	交
月			5	4	7
			三	内	交

竹生島

内之部卷之六ノ一

竹生島一

解説

竹生島二

始め嬖子方座着くと、作物臺、宮引廻しかけ、大小前に出す。尤も臺無し、宮計にても。夫より次第にて、ワキ、同ツレ二人と出で、舞臺に入り向き合ひ諺ふ。  
ワキ次第表 『竹に生る、鶯の』 此處さらりと諺ふべし。名宣、道行すべて同断。着キ濟み三人ともワキ座に座着く。

夫より作物舟、シテ柱先へ長手に出す。

一聲にて、シテ、ツレを先に立て出で、二人とも舟に乗り諺ひ出す。シテ權棹持つ。

ニテ表 『面白や頃は彌生のなかはなれば』 此處ハツキリ諺ふべし。

ニテ表 『長閑に通ふ船の道』 此處より調子に心づけ連吟すべし。

ニテ表 『是は此浦里に住馴て』 此處は改めて諺ふ。

ニテ表 『數をつくして身ひとつを』 此處より又調子に心づけ連吟すべし。

ワ三表 『いかには成舟に便船申さうなふ』 此處は少しかゝつて諺ふべし。

ワ四表 『けふは殊更長閑にて』 此處はかけて諺ふ。

物同表 『名こそさゞ浪や』 初同は軽くつけて諺ふ。此處にてワキ船に乗る。見計ひて諺ふ事勿論なり。

地二表 『所は海の上』 此處より心持變へて諺ふべし。

シ五表 『舟がついて候御上り候へ』 此處にてワキ、ツレ舟より下り、ワ

キは船座に行き、ツレは地の前に行き、角かけて立つ、シテは棹を捨て、舟より下り、扇持ちて

ワキへ向き、

『竹生島へ御参り候は、御道しるべ申候べし』 と、諺ふ。此内に舟、權、棹引く

『此方へ御入候へ』 此處にてシテ、右へ少し出で、作物に向ひ、

『是こそ竹生島の辨財

天にて候能々御拜み候へ』 と、諺ふ。

『なふそれまでもなき物を』 此處はかゝつて諺ふべし。

『唯知らぬ人の言葉也』 此處にてシテ、中に行き、下に住る、ツレも亦下にある。

『あら磯島の……』 此處にてツレ立ち、脇正面に行き、ワキへ向く。然る後作物へ中入。

『翁も水中に』 此處にてシテ立ち、少し形ありて中入、來序。此邊心得て諺ふべきなり。間濟み

出羽一段取り、高キザミ、ハネキザミになり、見合せて地より、

『御殿しきりに鳴動して』 と、諺ひかける。

『顯はれ給ふぞかたじけなき』 此處にて作物引廻し下す。ツレ中に床几にかゝり居る。

『月に輝くをとめの袂』 此處にてツレ臺より下り、出で開き、『おもしろや』と中ノ舞。

『夜遊の舞樂も時過ぎて』 此處はさらりと諺ふべし。

『波風しきりに鳴動して』 此邊より位進み、早笛となる。ツレ、ワキの上に行き下にある。

シテ、早笛にて出で、橋懸にて留むる時、

『龍神湖上に出現して』 と、地は手強く諺ふ。以下キリ、シテにもツレにも形種々あり、見計

ひ諺ふべし。

竹生島三

竹は鶴

次  
ワ  
リ

竹は鶴の舞の  
まろげいろが  
杯は

喜乃石代は  
口州竹は鶴の舞

みくは  
同は

申

竹







ありては 自ら 自ら 自ら 自ら  
 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹  
 福 福 福 福 福 福 福 福  
 中 中 中 中 中 中 中 中  
 一 一 一 一 一 一 一 一  
 一 一 一 一 一 一 一 一  
 一 一 一 一 一 一 一 一

ありては 自ら 自ら 自ら 自ら  
 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹 樹  
 福 福 福 福 福 福 福 福  
 中 中 中 中 中 中 中 中  
 一 一 一 一 一 一 一 一  
 一 一 一 一 一 一 一 一  
 一 一 一 一 一 一 一 一











250  
485

著作權所有

大正五年四月

四日印刷  
九日發行

東京市深川区西平野町一番地

著者 寶生九郎

東京市日本橋區通四丁目八番地

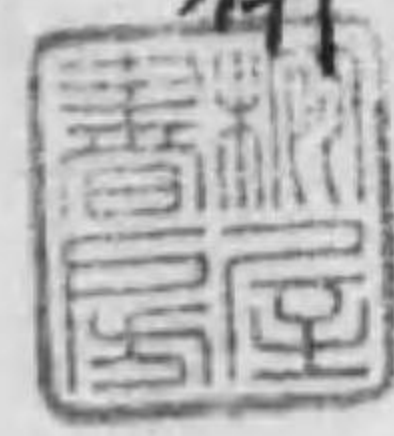
發行者 江島伊兵衛

東京市日本橋區通四丁目八番地

發行所 椀屋謡曲書肆

東京市神田區皆川町二番地

印刷者 田村茂太郎



遊水は新ひして波を蹴ぶそ  
ふまをうけてま地まひらがた  
舞のうらまを代は舞る大舞の  
かから龍宮まうんでくらりに  
まを

終

